沼津市
明治史料館通信

1998．1．25（季刊 年4回発行）Vol.13 No.4　通巻第52号

戦前まで浅間神社にあった脇屋義助願文
（沼津市立第四小学校所蔵アルバムより　昭和10年頃の撮影か）

今度為鎌倉追討、当所丸児神社天暦任霊、行光造太刀一振寄進之、武運長久篠塚五郎承之、宮仕子神尾蔵人於神前永代祈禱可有者也　建武二乙亥三月十五日　脇谷治郎源義助（花押）　丸児神社広前

ぬまづ近代史点描 ㊱

災害と史料保存

戦前の昭和七年（一九三二）に刊行された『静岡県史料』には、沼津所在の史料として戦国時代や江戸時代の古文書が多数掲載されている。ところがこれらの文書の中には現存しないものがある。火災等により史料が失われたためである。

特に沼津市の中心街、かつて沼津宿と呼ばれた地域は、住民の異動が激しく旧家がそのまま続いていることは少ない。さらに、近代に入ってからは何度も大火があり、さらに昭和二十年の戦災により多くの家が焼かれ、その分だけの歴史資料が失われた。

一九九五年の阪神大震災では、多くの文化財が被害を受けたが、倒壊したり焼失した民家とともにそこに保存されていた古文書等が失われた例は無数にあったと思われる。博物館は、災害に強い建物でなければならないことは当然として、普段でも緊急の場合でも、民間からの史料を受け入れられるだけの十分な収蔵スペースを確保しておかなければならない。

江原素六とその周辺〈30〉

神に仕えたサムライたち補遺

現在開催中の企画展「神に仕えたサムライたち―静岡移住旧幕臣とキリスト教―」では、江原素六と同様、維新後駿河・遠江に移住した旧幕臣（静岡藩士）で、クリスチャンとなった人々のことを紹介している。その概要は図録にもまとめた。ところが、企画展開催・図録刊行後、新たに判明したり気が付いた事実があるので、それらについて以下に述べることとする。

川村勇　川村勇（いさみ）については、図録の中では、明治八年（一八七五）カナダ・メソジスト教会の宣教師カクランから東京で受洗した、アメリカ留学の経験も持つ開成学校在学中の秀才であることなどを簡単に紹介した。その後、彼や彼の父親の素性が詳しくわかった。

勇の父川村正平（恵十郎、一八三五～九七）は、武蔵国と甲斐国の国境（現八王子市）にある小仏関所の関番を代々つとめてきた旧家の当主で、幕末には一橋慶喜に仕官、将軍になった慶喜に従いそのまま幕臣になったという経歴の人である。剣術をよくし、元治元年（一八六四）京都で起きた一橋家用人平岡円四郎暗殺事件に際しては、死客を追って反撃を加え、一人を倒したという強者であった（この一件は司馬遼太郎『最後の将軍』にも登場）。

川村正平・勇父子

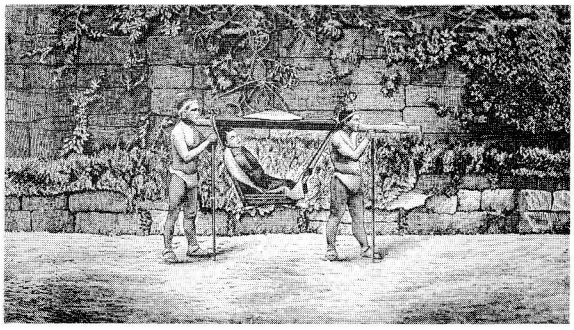
川　村　　勇
（川村文吾氏提供）

勇はその長男であり、維新後は父とともに駿府に移住した。静岡時代の勇はE・W・クラークに師事したともいうが、だとすると静岡学問所の生徒であったのかもしれない。しかし、後にクラークが刊行した著書『日本滞在記』の中で、開成学校教師時代に行った明治七年の関西旅行のことを記した部分には、同行した勇について「わたしがこれまで会った最も聡明で美しい日本少年だった」とあるものの、静岡時代の教え子であるとは一言も触れていない。

岩倉使節団といっしょに十三歳でアメリカへ留学、ミシガン州アナーバーで語学を学び、明治七年五月に帰国した。明治五年四月二十五日付の勝海舟日記には、在米の木村熊二から川村勇に関する内容の書簡が届いたことが記されており、アメリカでも静岡藩の人脈で動いていたことがうかがえる。

開成学校では工学を学んだが、若くして亡くなった。勇は多くの学友・知人から惜しまれたようで、谷中霊園に立つ顕彰碑は追悼のために建てられたものである。葬儀

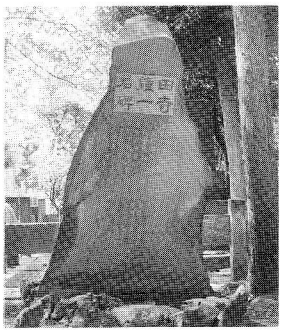
クラーク
（飯田耿子氏提供）


駕籠に乗った川村勇か（クラーク著挿絵）

はキリスト教式と仏教式とで別に営まれ、墓は東京本郷の寺に建てられたが、現在は八王子市の川村家墓所に合祀されている。

父の正平は上京後は大蔵省・内務省・宮内省などにつとめ、退官後には日光東照宮弥宜となった。

以上、川村正平・勇については、川村文吾「川村恵十郎（正平）伝」『多摩文化』24号（一九七四年）、同「小仏御関所番川村家」『月報五街道』58・59号（一九八八年）、同「旧幕臣川村正平（恵十郎）の生涯」『大日光』64号（一九九二年）、同「天然理心流の剣客川村恵十郎（正平）」『多摩のあゆみ』第86号（一九九七年）、同「幕臣川村恵十郎（正平）」『霊山歴史館紀要』第10号（同年）、同「甲州道中小仏御関所番川村家」『幕末史研究』33号（同年）などによった。


田寺鐘一君碑
（谷中霊園）

クラークが政府の招聘により静岡から開成学校へ転ずるに際しては、静岡の学生二人、織田顕二郎・田寺鐘一が同行し開成学校生徒となったという（『平岩愃保伝』21頁）。織田は明治十二年に東京大学理学部化学科を卒業、日本最初の化学の学会である東京化学会の会員にもなり、静岡中学校教諭などをつとめた。田寺は川村勇と同様、学業半ばにして病没した。その顕彰碑は谷中霊園の川村の碑の近くに立つ。織田・田寺ともクラークの愛弟子ではあったが、キリスト教には入信しなかったらしい。参考のため左に田寺の碑文を掲げよう。

田寺鐘一君碑

権大史巌谷修題額

開成学校同志撰并書

君諱鐘一田寺氏以安政六年四月生於開成所官舎君少俊敏有風彩善擇朋友而慎其行明治元年従父移静岡修漢英二学五年夏再東上家横港入開成学校益自刻苦攻化学遂進至予科一級名聲大顕校中目以大器会父病帰看護焉未幾君得病歿実明治九年四月旬又五日也享年十有七葬谷中海荘院同学五十余人捐資為建碑于天王寺以表追悼之意云

明治九年八月　広群鶴鐫

坂湛　静岡学問所でクラークに師事した生徒の一人に、工部大学校機械科に進学、後に海軍造兵廠に勤務し、さらに川崎造船所に転じて取締役となったという経歴を持つ、工学博士の坂湛（たたう）がいる。彼は侍医坂春庵の三男であり、安政二年（一八五五）の生まれ。神戸に在住していた際は、アメリカ南メソジスト監督教会の神戸中央教会員であり、明治二十二年（一八八九）の関西学院創立にあたっては初代院長ランバスを助けた（『関西学院七十年史』）。

小田幸次郎　明治二年の静岡藩の役人名簿に沼津勤番組十三番頼世話役介として小田幸次郎の名前がある。同名異人ではないとすると、彼は明治十一年（一八七八）に東京でカクランから受洗した人である。幕臣平岩馨明の弟、すなわちカナダ・メソジスト教会牧師平岩愃保の叔父にあたる。妻のとうは、浜松移住旧幕臣クリスチャン田村初太郎の従姉妹である。小田夫人の母、田村初太郎の叔母ますは火付盗賊改酒井大助に嫁ぎ、後に東洋英和女学校裁縫教師兼舎監となった。小田幸次郎は明治十八年没（『鳥居坂教会百年史』）。

永井繁子　海外留学中に信仰を獲得した者には、木村熊二・大儀見元一郎・田村初太郎らがあげられるが、他に幕臣の娘であり最初の女子留学生となった永井繁子（結婚後瓜生姓、一八六一～一九二八）も加えなければならなかった。津田梅子や山川（大山）捨松とともにアメリカに留学した繁子は、静岡藩沼津病院三等医師永井玄栄の養女であり、義兄には沼津兵学校第七期資業生永井久太郎がいた。

永井繁子
（『津田英学塾四十年史』より）

沼津市
明治史料館通信

1998．1．25（季刊 年4回発行）Vol.13 No.4　通巻第52号

戦前まで浅間神社にあった脇屋義助願文
（沼津市立第四小学校所蔵アルバムより　昭和10年頃の撮影か）

今度為鎌倉追討、当所丸児神社天暦任霊、行光造太刀一振寄進之、武運長久篠塚五郎承之、宮仕子神尾蔵人於神前永代祈禱可有者也　建武二乙亥三月十五日　脇谷治郎源義助（花押）　丸児神社広前

ぬまづ近代史点描 ㊱

災害と史料保存

戦前の昭和七年（一九三二）に刊行された『静岡県史料』には、沼津所在の史料として戦国時代や江戸時代の古文書が多数掲載されている。ところがこれらの文書の中には現存しないものがある。火災等により史料が失われたためである。

特に沼津市の中心街、かつて沼津宿と呼ばれた地域は、住民の異動が激しく旧家がそのまま続いていることは少ない。さらに、近代に入ってからは何度も大火があり、さらに昭和二十年の戦災により多くの家が焼かれ、その分だけの歴史資料が失われた。

一九九五年の阪神大震災では、多くの文化財が被害を受けたが、倒壊したり焼失した民家とともにそこに保存されていた古文書等が失われた例は無数にあったと思われる。博物館は、災害に強い建物でなければならないことは当然として、普段でも緊急の場合でも、民間からの史料を受け入れられるだけの十分な収蔵スペースを確保しておかなければならない。

留学直前まで沼津で暮らしていたのである。実父の益田鳳は外国方などに勤務した幕臣で、後にカナダ・メソジスト教会信者となっている（『日本メソヂスト下谷教会六拾年史』）。長兄は幕府騎兵頭から三井物産初代社長となった益田孝である。次兄の益田克徳夫人も下谷教会に属した信者。繁子は預けられたアメリカの家庭でキリスト教に接し入信したらしい。ニューヨーク州のヴァッサー・カレッジで音楽を学び卒業、明治十四年に帰国した。東京音楽学校や女子高等師範学校で教鞭をとり、音楽教育に貢献した。夫の瓜生外吉は海軍大将・男爵になった人であるが、若き日の明治初年、カロゾルス（アメリカ長老教会宣教師）から洗礼を受けており、田村直臣・原胤昭らとともに「築地バンド」の一員だった（『信仰三十年基督者列伝』）。繁子が日本ではどこの教会に属したかは不明であるが、敬虔なピューリタンとして信仰は守り続けたらしい。

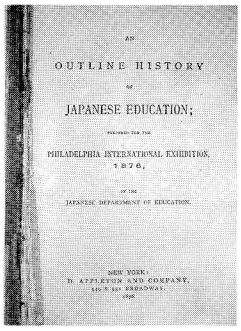
宇田一美　ロシア正教は明治八年（一八七五）、元沼津藩士が導き伊豆に入ったのが静岡県の最初であるが、やがて沼津にも信者が生まれ教会が設立された。図録では、沼津の士族層には影響はみられなかったとしてしまった。ところが駿東郡東椎路村移住の旧幕臣で教員になった人物に受洗者がいたことを見落としていた。椎路舎や富士岡・片浜・鷹根・八木沢などの小学校で教鞭をとった宇田一美（一八五二～一九〇二）がそれである。彼は幕臣天野一興（駒吉）の次男で幕末には撤兵だった。明治十三年（一八八〇）二十七歳の時、洗礼を受け、イサイアという聖名をもらい沼津教会に属した。信仰を全うしたかどうかは不明（三島ハリストス正教会「銘度利加」、『翔雲』、天野勝美氏所蔵史料などより）。

宇田一美
（天野勝美氏提供）

お知らせ欄

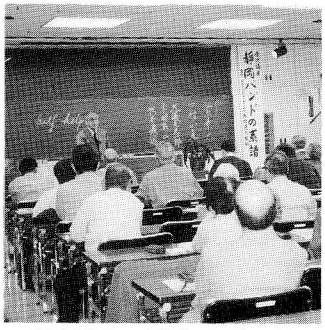
◎日本最初の英文日本教育史が寄贈されました

去る十二月十一日、一八七六年にアメリカで開催されたフィラデルフィア万国博覧会に日本政府が出品した英文の日本教育史が当館に寄贈されました。これは表題をOUTLINE HISTORY OF JAPANESE EDUCATIONといい、日本語で執筆された原稿を博覧会用に英語に翻訳しニューヨークで刊行したものであり、英訳の担当者は元沼津兵学校教授乙骨太郎乙でした。今回、乙骨の孫にあたる小牧市在住・正木みちさんが当館に来館され、寄贈して下さいました。また正木さんは、英文の本書を日本語に再翻訳し、去年『概要「日本の教育の歴史」』（近代文芸社）として出版されています。博覧会の翌年、一八七七年、文部省は同書の原稿を『日本教育史略』として刊行していますが、正木さんの翻訳書（つまり英文刊行書）とは内容に異同があり、外国向けに何を省略し、何を付け加えたのかなど、両書を比較検討することが可能になりました。当館では本書を大切に保存させていただきます。


AN
OUTLINE HISTORY
OF
JAPANESE EDUCATION;
PREPARED FOR THE
PHILADELPHIA INTERNATIONAL EXHIBITION,
1876,
BY THE
JAPANESE DEPARTMENT OF EDUCATION.
NEW YORK:
D. APPLETON AND COMPANY,
443 & 445 BROADWAY.
1876
寄贈された資料

◎企画展「神に仕えたサムライたち―静岡移住旧幕臣とキリスト教―」好評開催中

2月22日（日）まで開催しています。



歴史講座のようす　11月8日

沼津市明治史料館通信　第52号
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410 沼津市西熊堂三七二―一
電話　〇五五九―二三―三三三五
FAX　〇五五九―二五―三〇一八